The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	契丹文字から見た世界史
Author(s)	武内, 康則
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2014, 10, p. 4-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/32762
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2013 年度大阪大学歴史教育研究会第 73 回例会報告要旨（2）

契丹文字から見た世界史

武内康則

契丹文字は、中国の史書では「契丹」と呼ばれた遼（916-1125 年）を建国した民族が、自らの言語（契丹語）を記すために作成した文字である。契丹語は既に使用者は絶え、契丹文字の解読も十分とは言えないことから、契丹語・契丹文字については明らかではない部分も多い。世界史の中で文字や言語は重要なテーマの一つであり、契丹文字についても世界史の教科書や資料集においてとりあげられている。しかし、それらはすべてが適切に説明されているとは言えない。

本報告では、はじめに契丹文字や契丹語の性質について概説し、契丹文字資料の出土状況について述べた。契丹文字資料は近年陸続と発見されており、契丹小字の初歩的な解読に成功した 1980 年代と比べると契丹文墓誌の量は数倍となっており、契丹文字の解読も進んでいる。次に、契丹文字研究の現段階として、契丹文字解読の研究史と契丹文字資料の研究方法について論じ、解読に向けた今後の課題について述べた。最後に、契丹文字資料の歴史研究・言語研究における位置づけについて述べ、他の文字との関係や文化接触等、世界史の教育現場における契丹文字の取り上げ方について考えを述べた。同時に、現行の世界史教科書や資料集に見える記述の問題点・改善点についても述べた。